

地球守視察・調査 千葉県いすみ市 夷隅川プロジェクト

環境土木がつくる 災害復旧の新たな選択肢

千葉県内で貸別荘をつくり、人々が自然と触れ合う機会を家族で提供している東(仮名)さん。4年がかりで準備し、竣工が見えてきた夷隅川沿いの所有地で、今年5月の長雨後、土手斜面に大きな崩落が起きました。2級河川である夷隅川の崩落は、通常であれば県の土木事務所が施工します。民地の所有者である東さんは、一旦復旧工事同意書にサインをしたものの、従来の現代土木の施工方法を採用して、土地を傷めるのではなく、水と空気の流れる環境を育み、よりよく土地が育つ伝統的な知恵を活かした環境土木による施工を希望し、同意書を白紙に戻す旨を土木事務所に伝えました。行政による施工であれば東さんの経済的な負担はもちろんありません。でも、土地に対するご自身の信念と、地域の自然環境への思いから、東さんは自己負担で高田造園に工事発注を行いました。また、すでに民間会社に緊急工事を発注していた県土木事務所に高田と環境土木研究所理事とともに足を運び、図面をもとにプレゼンと説明を行うなど、誠意と熱意ある対応により、土木事務所側の工事は中止され、前例のない民間による復旧工事が可能になりました。全国で頻発する生活環境の中での崩壊・崩落が起きた時、コンクリートで固めずに、環境を育てながら自然と調和する復旧工事の選択肢を示したい。東さんの思いの背景をお聞きしました。

お金で買えない環境と心地よさ

夷隅川沿いの土地を取得した時、御神木のように土手に立つエノキの大木も樹勢はもっと強かったし、対岸の森も豊かで、貸別荘の土地としてとても良い場所に見えたのです。それが1年、2年と経って家が建ち、3年、4年経って内装ができてきた時、気づいたら土地が荒れ、どんどん御神木が弱り、心地良さが失われてしまっていることに気づきました。

環境土木を知らない当時の自分には、水脈が滞って表面が乾いた土地の状況は言語化できず、ここにお客様が来た時に楽しんでくれる感覚を持てずに、ただ焦り、苛立っていました。

自分なりに見よう見まねの“自然派”な外構工事を突貫で行って、オープンに向けて準備をしていました。

崩落で気づいた土地本来の力

そして、5月下旬の長雨後、土手は大きく崩落しました。内装工事は9合目まで完成しており、あと少しで完成という時の晴天の霹靂でした。崩落の規模は目を疑うほどで、景色も一変しました。

土地を買う際に行われていた無理な造

成、自分の突貫工事の失敗が頭をよぎる一方で、崩落後の地形には憑き物が落ちたような、スッキリとした不思議な感覚がありました。それでもやはり、今後を考えると不安に襲われ、GWに初めてワークショップに参加した地球守に繋るよう

にコンタクトし、高田さんによる現地調査を、6月に2度行って頂きました。1度目の調査では土木事務所が「造成による盛土の土砂崩れ」とひと括りにした事象に、土中の滞水、グライ化と土層分断化、結果として円弧状の崩落が起きたという論理が与えられました。2度目の調査では、測量により復旧工事の設計イメージがより具体化していきました。

円弧崩落と崩落した土砂が作り出した中洲の保護のため、焼き杭による枝がら工も実施することができました。このたった2回のプロセスだけで、水脈が復活し、流れる空気がしっとりとしたものに変わってくることを実感しました。

この感覚は誰かが手ほどきをしてくれないとなかなか持てないものだと思います。現場で、人間の本能をフル動員させて、自然の自己回復作用をマイクロにマクロに読み解く高田さんの解説は、小学生でもわかる平易で直感的なものです。

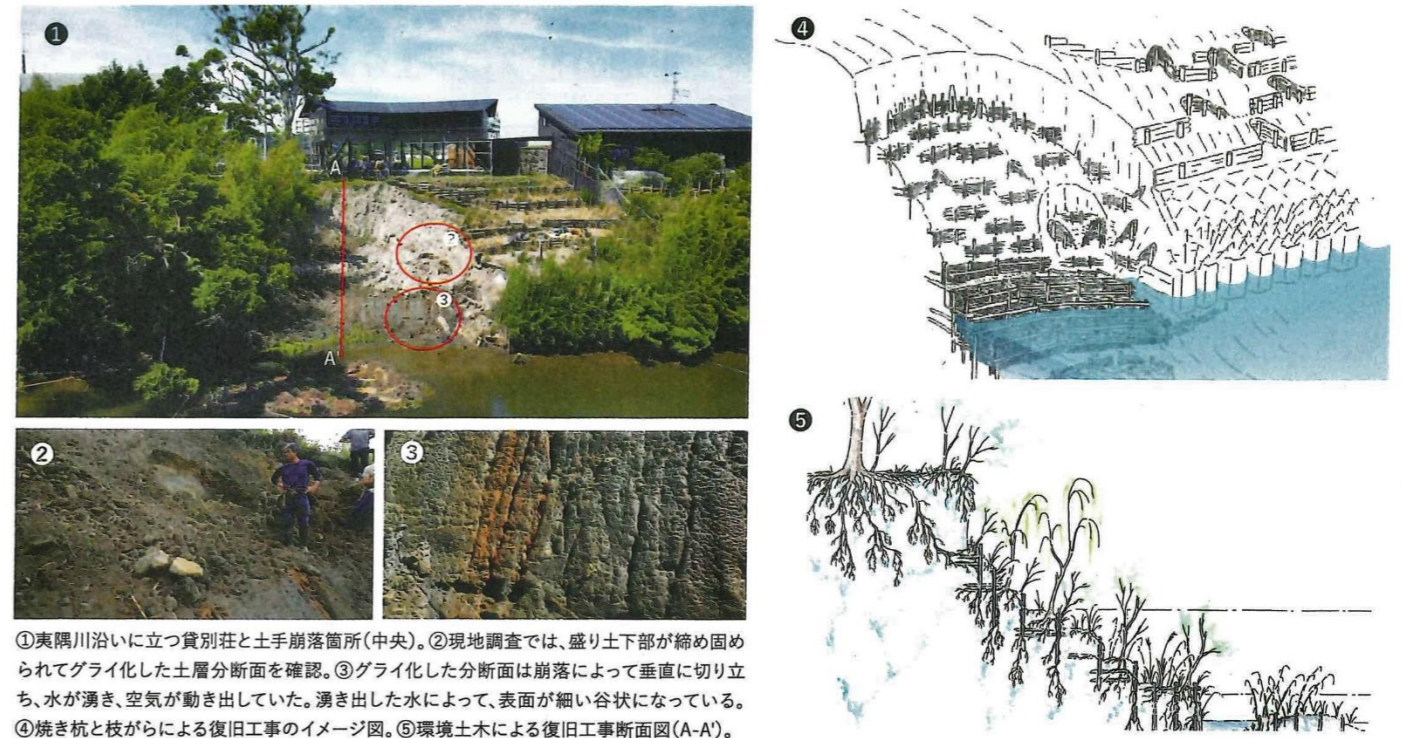


民地河岸際に焼き杭を千鳥に打ち、停滞した土中の水の動きを促し、湧き出しをつくる。

この崩落は、土地そのものが土中の水と空気の流れを取り戻して安定化に向かう自然なプロセスであり、貸別荘で住まいづくりを生業とする自分に、大きな気づきを与える必然の出来事と感じられたのです。そして、全額自費であってもこの土地にとってベストな復旧工事をしようと決心したのです。

未来の選択肢を広げる対話を

多くの人にとって、私のような一歩を踏み出すまでに、さまざまなハードルがあるのではないかと思います。仮に田舎暮らしを始めた人が、敷地で崩落が起きたら、それは「災害」に遭ったという意識で、自分は悪くない、行政がなんとかし



①夷隅川沿いに立つ貸別荘と土手崩落箇所(中央)。②現地調査では、盛り土下部が締め固められてグライ化した土層分断面を確認。③グライ化した分断面は崩落によって垂直に切り立ち、水が湧き、空気が動き出していた。湧き出した水によって、表面が細い谷状になっている。④焼き杭と枝がらによる復旧工事のイメージ図。⑤環境土木による復旧工事断面図(A-A)。

てくれるだろうと考えてしまうかもしれません。

しかしこのような場合に行政が提示する選択肢は、緊急工事であり、基本的には崩れた箇所をコンクリートの力で押さえ込み、形だけを元にもどす工事です。自然な植生は二度と戻らないのです。

さらにいえば、多くの人がコンクリートで固めることに何の疑問も持ちません。人工物で囲まれ、自然の循環から外れ、死生観を失って生きる現代社会の病がそこにはあるのではないのでしょうか。

そもそもコンクリートで固めたくない、と思う人は、自然はお金で消費する対象でなく、人も自然の一部であることに気づいている人だと思います。

それでも私に起きたような崩落に遭い、現代土木による高額な緊急工事を行う同意書を行政から求められたら、怖くてサインをしてしまうでしょう。私も一度はサインをしてしまいました。高田さんと地球守のみなさんのサポートを得られ、この選択肢にたどり着くことができた私は幸運でした。自分の直観に従い、自然や環境を守るために、行政との対話を諦める必要はないのです。

実際に自分自身が環境土木の造作に

参加することにも大きな意味があります。本来の土木は文字通り「土」と「木」で、人の助けを借り、自分の手で土地を整えて育てることができると実感することなのです。自然の循環を感じ、環境を自分の手で良くするという体験には、生きる上での根源的な喜びがあると思います。

災害復旧の新たなスタンダードに

今回、環境土木によって護岸工事にかかるお金は、50年後にコンクリートを打ち直さなければならない現代土木の工法と比較しても、経済的にも実は最高の費用対効果があります。適切な造作によって生まれる鎮守の杜のような土地の環境は、きっと100年後もみずみずしくそこにあるからです。

今だけ、自分だけが良ければいいという世の中を、資本主義や民主主義がつくってしまっている中で、次世代のために自然環境を再生し、残していくためのやさしいお金の循環や、人の結びつきを育む地球守の活動は、この時代の大きな希望です。

一方で、今回行われる環境土木の施工ができる技術を持つ方がまだまだ少ない中で、社会実装と普及には課題がある

と感じます。ぜひこのプロジェクトを災害復旧の新たなスタンダードのための実績とし、人の輪を広げ、行政に働きかけを行い、社会実装と普及に資するものにできればと思います。

あるがままの自然と人が共生していれば、土地に貴賤はなく、あらゆる土地は一等地に育てることができるのです。みずみずしい地球守のダーチャもかつては荒地でした。しかし、現代の消費社会では、あるがままの自然とそこでの暮らしはますます手に入りにくいものになり、日々失われています。美しい自然環境を残すために、古の知恵に学び、当たり前の選択肢を今作っていく必要があると思うのです。長年受け継がれて生き残ってきたものは、永遠に新しいのだから。

私にとっても、今回の復旧工事の費用負担は決して小さいものではありません。しかし、土地を読み解き、建築と環境を一体のものとして捉え、生命の棲家である人の住まいを作り、美しい風景を次世代に残すことを生業としていくため、この経験を貴重な学びの機会として、みなさまの力をお借りして、取り組んでいきたいと思っています(談)